

けいれん発作の見方・考え方

熱性けいれん・ひきつけアレコレ / 熱性けいれんと解熱剤

Q 「熱が出たら解熱剤を早く！」は正しい？

2011/ 8/11 改

Q 「38.5℃以上になったら解熱剤を用いる」は正しい？

2005/ 8/24 改

Q 「熱が出たらひきつけるから解熱剤を早めに使う」は正しい？

A : いずれも正解とはいえません。そのわけを考えてみましょう。

子どもの急な発熱は、大半がウイルス感染症です。体の中にウイルスが入り込んで、「ウイルス血症」の状態になったために、体はウイルスが増えにくい環境とするために発熱するのです。つまり、発熱は正常な生体の防衛反応、免疫反応が発熱です。機械的に体温が何度になったから解熱剤を使うというわけにはいきません。子どもは脱水症に陥り易いので、水分摂取が大切になります。《→「家庭における感染症対策」参照》 水分を取らせようとしても、高熱で、辛そうにして、水分摂取が進まないときに、解熱剤を用いて体温を少し落として、水分摂取に努めたいのです。

なお、体温が39.5℃以上であってもニコニコしている乳幼児に出会うことが多々あります。稀ですが、体温がそう高くないのに重症感のある子どもさんにも出会います。つまり、体温と重症度は必ずしも一致しません。

Q : どんな場合に熱性けいれんになるの？

A : 熱性けいれんの起こる状況を図示します。

熱性けいれんは、急な発熱に、脳が変化に耐えられず、いわば脳がパニック状態に陥った状況といえます。熱性けいれんを来しやすいのは、図のs1・s2・s3などです。

s1は、それまで元気であったのに急にひきつけてしまい、触ると体が熱かった。つまり、発熱したという場合です。

s2は、発熱に気づいていて、高熱になって、ひきつけたという場合です。

そして、少数例ですが、s3のように、発熱後しばらくして、より体温が高い状態に変化するときに、いわばついに耐えきれなくなって、ひきつけたという場合もあります。

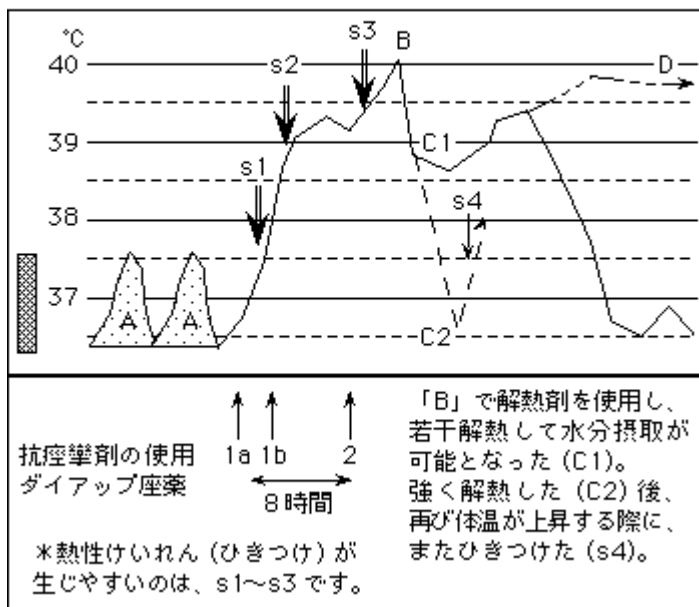
Aは、乳幼児の体温のリズムを示しています。朝方には最も低く、午後に体温が最も高くなる「日内リズム」がありますが、乳幼児は大人より高いわけです。幼児期までは37.5℃前後までが平熱です。このリズムが大きく崩れるときにパニック状態、つまり、ひきつけるというわけですね。ひきつけない場合でも、熱の出始めは、子どもたちにとって、大人にとっても、つらいわけです。

Bで、高熱になったため水分摂取が進まない場合や辛そうにしている場合には解熱剤を用いることになります。用いる解熱剤は、少し熱が下がって、いくぶん楽になり、水分摂取が出来るようになることを目的としたいのです。c1の状態を目指したいのです。一方、強い解熱剤を用いて、c2のように平熱にまで下がりますと、再び体温を上げようとする身体の反応が生じます。つまり、s4のようになり、熱性けいれんの点からすると、再び、けいれん発作が起きやすい状態になります。

脱水症に陥らないように、水分摂取に努めること、こまめに水分を取ることが大切です。

「熱性けいれん」を起こしやすい時と解熱剤の使用法

模式図であり、時間軸は不正確です。



風邪による発熱は1日程度であったりしますが、中には、高熱が数日に及んだり、ウイルスの種類によっては1週間近くに及んだりすることがあり得ます。熱性けいれんの点からすれば、発熱が続いても(D)けいれん発作は通常起こらないのです。

なお、高熱が続く場合、急性肺炎、急性上部尿路感染症(腎盂炎)川崎病、急性脳症・化膿性髄膜炎などの場合は例外で、(D)のように発熱が続くまでに診断され、治療が開始されていることでしょう。

熱性けいれんの既往のある方の場合、解熱剤を入れる前に、まず抗けいれん剤の座薬を用います。その後、水分摂取の状況などから、必要に応じて、解熱剤の使用を考えます。

◆ 抗けいれん剤の座薬の使い方 ◆

抗けいれん剤の座薬(ダイアップ座薬)を、子どもが不機嫌になり、ぐずぐずしはじめて「発熱するかもしれない」思えたとき(⇒図1a)や「熱が出ている!」と気づいたとき(↑1b)に肛門から1個を入れます。そして、おおよそ8時間後に38℃以上の発熱が続いているとき(↑2)に、もう1個を入れます。もし、6時間後に高熱であって、8時間後まで待てないときには、どうぞ2個目を用いてください。あるいは、深夜であったりした場合には、発熱が持続していることに気づいたときが6時間後であっても2個目を入れてから、休んでもよいでしょう。逆に、深夜に目覚めたら10時間後であった際にも、発熱が持続していたら2個目を用いてください。

2個目を8時間後に入れるのは、決定的なことではありません。体温の状況、皆様の不安、生活時間帯を加味して、6~8~10時間後に2個目を用いることをお話しています。最初の1個を肛門から入れたからの発熱期間が短く、体温上昇も38℃以下に留まっている場合は、2個目は不要になります。

以上の方法で、熱性けいれんを予防するのですが、しかし、けいれん発作が起きてしまったという場合や、出生前後の既往、発達歴、脳波所見など、その他多くの要因を考慮して、あるいは、抗けいれん剤の内服を、日々、期間を限って、開始することもあり得ます。

Q: 子どものけいれん発作が強いとか重いとかは...? また、頻度は?

A: 頻度ですが、3歳児健診などを通じた調査で、7%程度に既往があります。

子どものけいれん発作、ひきつけは、まれなことではないのです。大半が「熱性けいれん」です。

けいれん発作を来す原因・背景を右表で確認します。

熱性けいれんでは、通常左右差はありません。「左右差があるということは、ひょっとしたら脳の一侧に傷があるのかもしれない」と考えさせる要素となります。脳波検査やCT・MRIなど脳の画像検査の適応を決めます。けいれん発作の持続が長いと心配ですね。通常、熱性けいれんは5分以内で終ることが多いのです。

Q: けいれん発作の対処法は?

A: とにかくあわてないことです。けいれん発作の時は、おう吐したり、口の中に分泌物が増えます、よだれが出るような状況になりますから、顔を横に向けます。そう、右肩をやや高くするなどです。これも表にしてみました。

子どもの場合はけいれん発作時に、呼吸の妨げにならないように、口にモノを入れないことが基本です。その他、右の表を参考にいただければ幸いです。

可能なら目や手足の位置と動きの観察もしましょう。

心配な場合は119番、救急車対応となります。

| 発作の見方 | 注意事項 |
|----------|-----------------|
| 左右差は? | 目の向き・手足の左右差 |
| 持続時間は? | 5分以上(10分~15分以上) |
| 回数は? | 24時間以内に2回以上 |
| 体温は? | 38℃未満 |
| 初回時の年齢は? | 半年未満・3歳以上 |
| その他 | 新生児期の既往や疾病歴など |

けいれん発作時の見方と対処

- ・あわてない
- ・ねかせる
- ・右肩をやや上げるなど、顔を横に向ける
- ・口の中にモノを入れない
- ・布団を除き、衣服をゆるめる
- ・観察
 - ~時刻・持続時間
 - ~目の位置や唇・顔の色・手足の動きや固さ
- ・救急車を依頼する?!
 - ~5分以上続く場合
 - ~チアノーゼが強い
 - ~何かとても心配(初回の発作経験)